



Co-pic
4.12 — 6.23, 2024
10:00—18:00
入場無料 月曜休廊

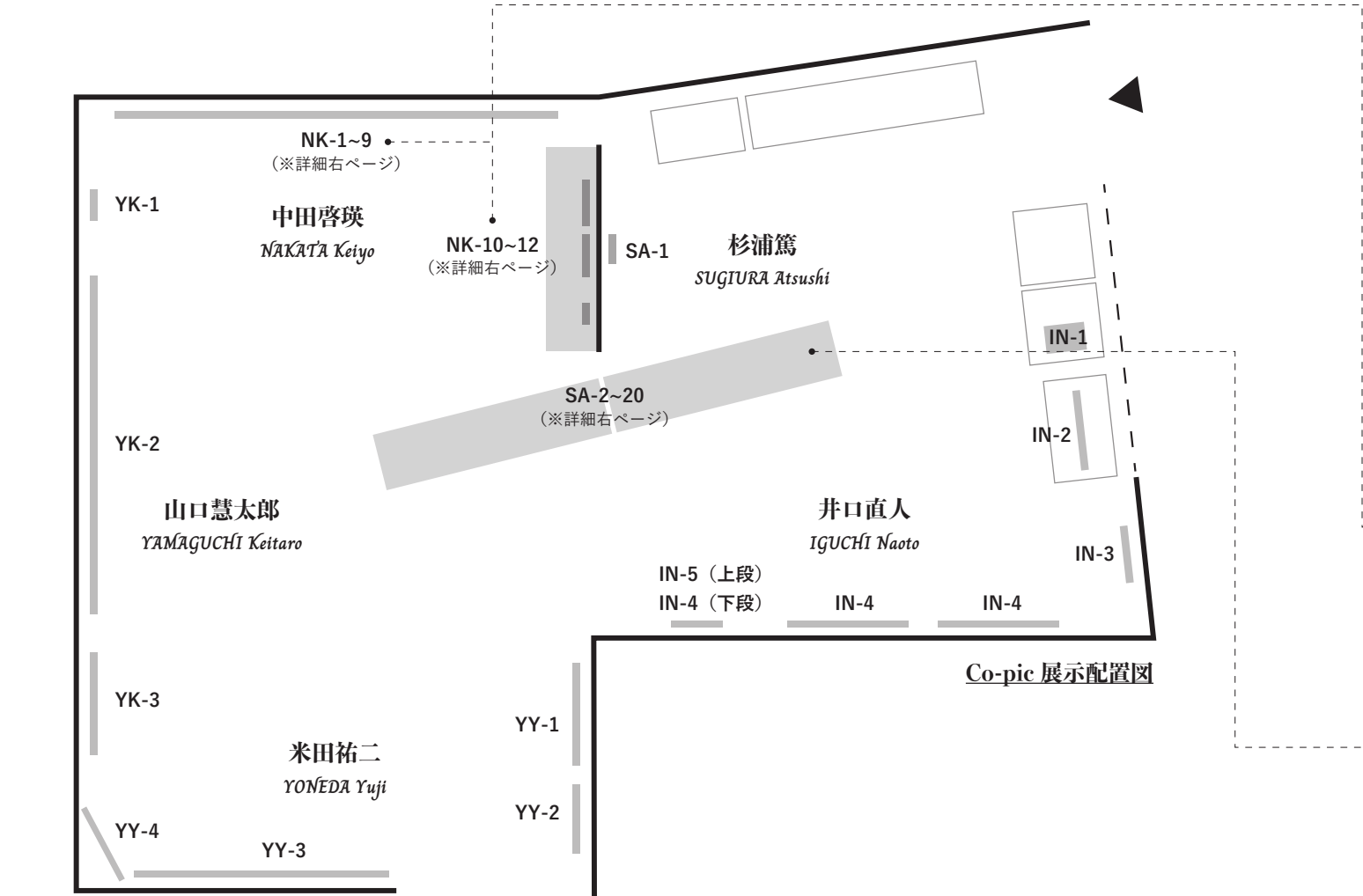
山口慧太郎にとってレンズは外の世界を見るための窓ではなく、シャッターを押す時に左手をかけるためのちょうどよい突起物である。井口直人は 2 色に設定したコピー機で、自身の顔を複写する衝撃的な行為を 20 年あまり続けている。思い出のある写真が朽ちた古写真のように変化するの、杉浦篤が深く愛でるように触れるから。幼少の頃からカメラを手にして日常を切り取ってきた中田啓瑛は、日々自身のファッションを記録している。米田祐二の写真は日々の暮らしの中での視点を映し出すが、撮影からはじまる一連の工程が他者とのコミュニケーションの重要な手段となっている。

本展では art space co-jin+picture=「Co-pic」と題し、上記 5 名の営為の中から、写真を通して生じた独自で多彩な世界を紹介する。そこでは「表現」や「作品」といった枠組みでは捉えきれない景色が広がる。

最後になりましたが、本展覧会にご協力いただきました各作家の皆様、並びにご親族、各施設、関係者の皆様に謹んでお礼申し上げます。

主催：きょうと障害者文化芸術推進機構

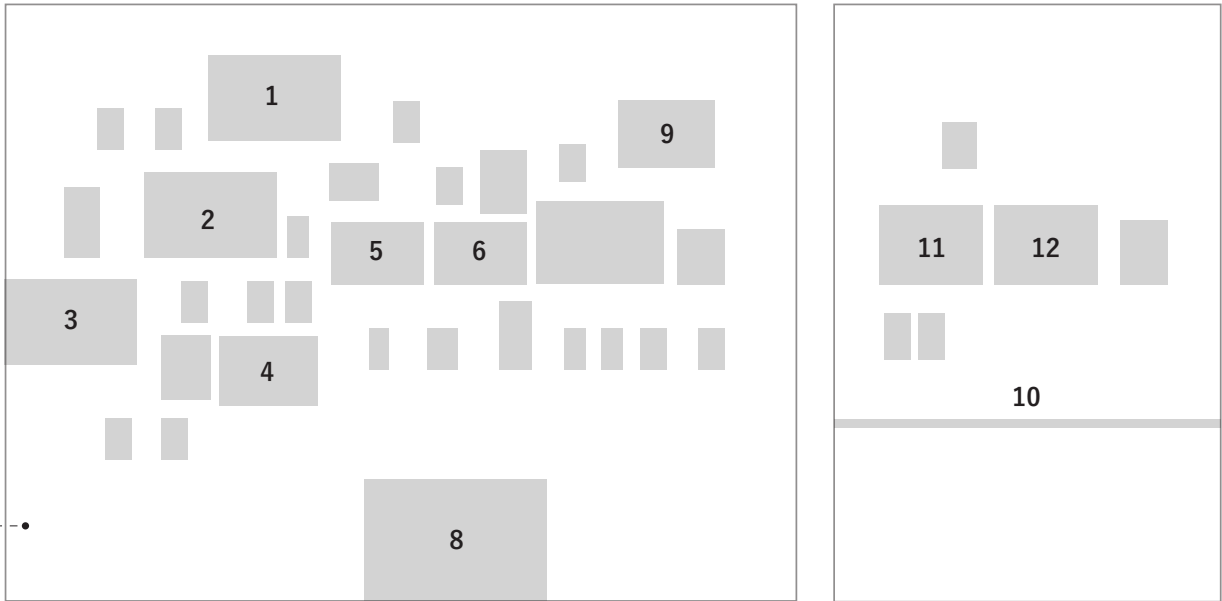
協力：社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園、社会福祉法人 みぬま福祉会
工房集、一般社団法人 ヴァリアスコネクションズ ツナガリの福祉所



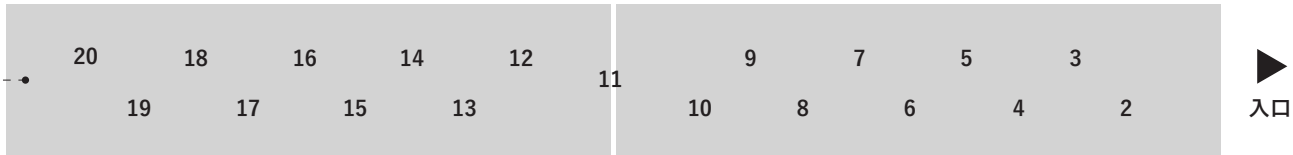
出品作品リスト（※配置図に作品番号のないものは全て「無題 | インクジェットプリント」、下記リストに記載なし）

作家名	作品記号	タイトル	制作年	素材・技法 備考
井口直人	IN-1	井口直人作品集 ストレートヒューマン	2024	発行：SFRN（社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園）
	IN-2	井口直人 資料映像	2024	5 分 44 秒（制作：art space co-jin）
	IN-3	無題	2024	コピー用紙にレーザープリント 車に轢かれた「風えー!」シリーズ
	IN-4	無題	不明	インクジェットプリント（原画はコピー用紙にレーザープリント）
	IN-5	腕章	不明	カラーコピー用紙、セロハンテープ、輪ゴム
米田祐二	YY-1	無題	2017	インクジェットプリント
	YY-2	無題	2010	インクジェットプリント
	YY-3	無題	2010-	インクジェットプリント
	YY-4	米田祐二 資料映像	2024	13 分 40 秒（制作：art space co-jin）
中田啓瑛	NK-1	夕立	2019	インクジェットプリント
	NK-2	ワンシーン	2018	インクジェットプリント
	NK-3	京の路地	2016	インクジェットプリント
	NK-4	春休み	2015	インクジェットプリント
	NK-5	僕のたのしみ	2020	インクジェットプリント
	NK-6	草いきれ	2016	インクジェットプリント
	NK-7	花と風	2018	インクジェットプリント
	NK-8	夏の少女	2018	インクジェットプリント
	NK-9	無題	2021	インクジェットプリント
	NK-10	中田啓瑛 写真集	2015-2022	-
	NK-11	ママの仕事部屋	2008	インクジェットプリント
	NK-12	僕、ケイヨウ	2007	インクジェットプリント

中田啓瑛 | NK-1~20（※下記配置図内、作家記号「NK」は省略して記載）



杉浦篤 | SA-2~20（※下記配置図内、作家記号「SA」は省略して記載）



作家	作品記号	タイトル	制作年	素材・技法 備考
杉浦篤	SA-1	題名なし	不明	カラー印画紙（※杉浦篤作品全て、以下省略） 杉浦さん宅の飼犬サミー
	SA-2	題名なし	1997	-
	SA-3	題名なし	不明	-
	SA-4	題名なし	不明	-
	SA-5	題名なし	2002	飛行機の尾翼
	SA-6	題名なし	不明	-
	SA-7	題名なし	2002	-
	SA-8	題名なし	不明	太陽の家まつり（社会福祉法人みぬま福祉会の通所施設のお祭り）
	SA-9	題名なし	不明	-
	SA-10	題名なし	不明	父の墓がある市営霊園（さいたま市思い出の里）
	SA-11	題名なし	不明	旅先の駅のホーム
	SA-12	題名なし	2002	教会のステンドグラス
	SA-13	題名なし	不明	-
	SA-14	題名なし	不明	-
	SA-15	題名なし	不明	-
	SA-16	題名なし	1997	旅行中の空港
	SA-17	題名なし	2002	母がイタリア旅行中に観光した美術館もしくは教会
	SA-18	題名なし	不明	太陽の里の仲間（利用者）たち。 （施設の旅行。杉浦さんが行った旅行ではない。）
	SA-19	題名なし	不明	父との旅行、那須山
	SA-20	題名なし	1999	-
山口慧太郎	YK-1	山口慧太郎 撮影の記録 （京都御苑にて）		3 分 38 秒（制作 :art space co-jin）
	YK-2	手がかり	2016-2024	インクジェットプリント
	YK-3	手がかり	2020	インクジェットプリント



井口直人「無題」2018

井口直人

IGUCHI Naoto

1971 年生まれ、愛知県在住

所属：社会福祉法人さふらん会さふらん生活園

行きつけのコンビニや通所する施設のコピー機を使い、自身の顔と空き缶の応募シールなどその時に気になったものを写し取る記録を 1 日に 3 回行なっている。職員との遊びからはじまったこの活動は、試行錯誤を繰り返しながら約 20 年あまり続いており、現在では地域の日常の光景として周知を得るようになった。

井口のライフワークはアートユニット「THE COPY TRAVELERS」との展覧会開催などでも注目を集め、その活動は芸術分野だけでなく様々な業種との交流にも広がりをを見せている。最近ではその出力した紙を所属する施設前の道路に置き、風で飛ばしたり、道を行き交う車の風圧で舞い上がる様子を見て楽しむ、通称「風えー！」シリーズと呼ばれる行為がブームになっている。支援員は外で紙を見かけるとレスキューするが、すでにタイヤ痕がついていることも珍しくはない。レスキューされた作品はファイリングされている。雨が降れば溝に流されることもあるし、遠く 3 ブロック先で見つかることもあった。本展では 2 色 × 2 回のコピーを施した作品や、母と共同で創作して特定の人にプレゼントする「腕章タイプ」のコラージュを公開している。



杉浦篤「題名なし」制作年不詳

杉浦 篤

SUGIURA Atsushi

1970 年生まれ、埼玉県在住

所属：社会福祉法人みぬま福祉会 工房集

杉浦は気に入った写真の思い出をひとつひとつ確かめるように触り続けている。ゆえにその物質的に徐々に擦り切れ薄れていくことになる。例えば夕食後や朝食前のリラックスできる時間に、自室の引き出しやベッド脇の棚に置いてある写真の中から気に入ったものを選び、それらを触って過ごす。それは彼にとって、とても大切な時間であるようだ。その行為の積み重ねによって、彼のプライベートな思い出の写真は風化して私的なイメージを抽象化していく。同時に彼の行為を写真に定着させ、一つの表現として他者と共感可能なものへと変化させていく。また、杉浦と写真という私的な関係性の成り立ちには、それを表現として社会に見せようとした職員の存在が重要である。アートであるかどうかなど関係なく、ただ「彼が大事にしていること」を尊重し、見守り続けた職員たちとの関係性も潜んでいるのである。

中田啓瑛

NAKATA Keiyo

2001 年生まれ

徳島県在住



中田啓瑛「無題」2021

6 歳のころ、保育園の園長先生に使い捨てカメラの撮り方を教わったのがきっかけで写真を撮始めた。以来、身内や知人の日々の暮らしやルーツに興味を持ち、大切な人たちの日常の暮らしに佇む、様々な風景を撮り溜めている。母のデジタルカメラを使うようになり、後に一眼レフや RICOH の GR を手にした。

中田の写真の持ち味は、時間を切り取られた人の表情や土地、建造物や景色などに宿っている物語が自然と流れ出ることにある。彼は建物の間に入ったり緑の下に潜り込んだりして、そこからのアングルを「スキマの世界」と呼んだ。そのスキマからのアングルは、素朴なありきたりの日常を何かが息づく世界へと軽やかにスライドさせる。幼少より母の仕事のオーダー服の試着のためにモデルをしてきたこともあり、現在も毎朝仕事に行く前に、その日のファッションの撮影をしている。自作の写真集の中には「啓瑛の写真はみんなを幸せにします」と書き記した言葉もあり、日々写真という媒体を通して培われてきた親子の豊かな物語を読み解くことができる。

山口慧太郎

YAMAGUCHI Keitaro

2000 年生まれ

京都市在住

所属：一般社団法人ヴァリアスコネクションズ
ツナガリの福祉所

山口慧太郎「手がかり 手袋」2020

通所する「ツナガリの福祉所」では、2019 年からドローイングと共にデジタルカメラを使った写真撮影を始めた。レンズを左手で覆うように持つのが山口の撮影スタイル。延びたレンズは手をかけるのにちょうど良い突起物である。歩きながら、リアルタイムに液晶モニターが映す山口のゆびを含んだ景色を眺めつつ、シャッターを押す。1 時間ほどの外出で撮影する画像は 100 枚を超えることもある。撮影された写真《手がかり》は、何か対象を捉えるのではなく、ボタンの操作音や指先の感触も含めた行為を楽しんだ痕跡である。

その写真が淡く柔らかな赤みを帯びているのは、太陽の光が手を透かしたからで、一方の暗いグレーの画面は手はその光を遮ったため。ゆびさがが醸し出す色模様は、今ここに山口の確かな存在を知らせてくれるセルフポートレートとも言える。

米田祐二

YONEDA Yuji

1991 年生まれ

京都府八幡市在住



米田祐二「無題」制作年不詳

小学校高学年の頃より母の携帯電話で写真を撮りはじめた米田は、中学 3 年生の時にデジタルカメラを買ってもらったことをきっかけに本格的に写真を撮り始めた。以来、現在に至るまで撮影を続けている。例えば、近所の高架下、毎日の食事、季節の草花、こちらを見つめる猫、お出かけ先でのソフトクリーム、出会った人々、夜空に浮かぶ月。米田祐二の写真には日々の暮らしの中での彼の視点が映し出されている。

また彼にとって写真は、単なる視覚的な表現手段ではなく、「未知なるもの」を他者に伝えるための重要な手段になっている。繰り返し登場する朝食の写真は、学生時代に先生からの健康確認の質問で何を食べたかを答えるために撮影していたとされる。ただし情報の共有だけが写真の役割ではない。緻密な構図や対象の個数、形象、色彩、時間や動き、撮影の技術、データの管理などが生態系のような繋がりをしている点に米田の写真の本質的な要素がある。屋根が映り込む構図で何年にもわたり夕刻の空を撮影するのも、単なる習慣ではないことは確かだが、容易に他者が理解できるようなものでもない。一見すると、人懐っこく大らかで親しみのある米田の写真には、「未知なるもの」との関係性に満ちた語り尽くせない世界が広がっている。

アートと障害のアーカイブ・京都

The Kyoto Archive of Art by People with Disabilities

米田祐二の作品のうち 172 点はきょうと障害者文化芸術推進機構が運営するデジタルアーカイブサイト「アートと障害のアーカイブ・京都」にて閲覧することができます。

